

第1部 生涯と思想の概観

1. 伝記¹

グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペート (Густав Густавович Шпет)²は1879年4月7日(旧暦3月26日)、キエフで生まれた。

彼の祖父は、ウクライナの西北端、ポーランドと隣接する土地ヴォルィニで細々と領地を経営するポーランド系の小地主貴族であった。この小地主の娘、マルツェリナ・ヨシフォヴナ(オシポヴナ)・シュペート(Марцелина Иосифовна(Осиповна) Шпетт)が、或るマジャー人将校と関係を持ち、子供を身ごもる。しかし、その将校はマルツェリナと正式に結婚し、共に暮らす気はなかつたらしく、子供が生まれる前に彼女のもとを去って行く。この後、身重のマルツェリナは一人で家を出てキエフに移り住み、そこでグスタフを産む。こういうわけで、グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペートは私生児である。

本当の父親に見捨てられたグスタフの籍がどのようになっていたか、これについては証言が食い違っている。まずグスタフの孫の一人によれば、マルツェリナは体裁を整えるために、遠い親戚筋の男、ヤン(イヴァン)＝ボレスラフ・シュペート(Ян(Иван)＝Болеслав Шпетт)と結婚し、グスタフの父親になってもらったのである(だが結局、彼女はこの男とは生活せず、単身キエフに行った)³。しかし、その同じ孫が別の場所で言うには、マルツェリナはグスタフを親戚で友人であったヤンの養子にしてもらっただけであり、彼女はヤンと結婚はしてはいない⁴。さらに、グスタフの娘の一人が語るところでは、マルツェリナはグスタフを実の兄ヤンの養子にしてもらったのである⁵。このように証言は一致しておらず、確かなのは、グスタフの形式上の父親はヤン(イヴァン)＝ボレスラフ・シュペートなる男だったということのみである⁶。

マルツェリナは裁縫師で、この技術によってキエフで生計を立て、グスタフを養育した。彼女自身は高い教育を受けたわけではなかったが、彼女は息子には十分な教育を与えてやりたいと考えていた。グスタフはキエフの第2古典ギムナジウムに入るが、そこで彼はあまり熱心に学ばなかったようである。周囲の人々は、グスタフになんらかの職業教育を受けさせるようマルツェリナに勧めたが、彼女は息子がギムナジウムを経て総合大学にまで進むことを望んだ。

1898年、シュペートはキエフの聖ヴラジーミル大学(キエフ大学)の物理・数学部に入学する。19世紀終わり頃のキエフはロシア帝国内で最も文化的な街の一つであった。しかし、シュペートがまず関心を持ったのは、学芸ではなく政治活動であった。この頃、聖ヴラジーミル大学の学生たちの間ではマルクスがもてはやされており、シュペートも入学当初こうした風潮に与する。彼はマルクス主義関係の著作を翻訳し、これを広く知らしめる活動に従事する。だがこの活動が理由で、1900年、第2年次に彼は大学を除籍になり、さらにはキエフから追放されることになる。

1901年、シュペートは大学への復帰を許可される。けれどもこの際、彼はかつての所属先である物理・数学部には戻らず、あらためて歴史・文学部に入り直し、そこで哲学を学び始める。しかも彼はこれ以後革命運動から一切手を引いてしまう。復学の少し後に彼はこう言っている。「マルクス主義の功績は評価し切れぬほどであり、それゆえ、これに対しては敬意をもって接しない

ではられない。しかし、マルクス主義はいくつもの誤りに陥っている。認識論的および方法論的な誤りに」⁷。革命運動へ関与した短い季節を経て、今やシュペートが見出したのは「認識論的および方法論的」問題であった。この問題を解決するために、彼は哲学へ向かったのである。

キエフ大学復帰後のシュペートが一転して身を投じた歴史・文学部の哲学講座では、その頃ちょうどG. I. チェルパーノフ (Г.И.Челпанов) が指導する心理学ゼミナールが目立った役割を演じ始めていた。シュペートはこのゼミナールの一員として研究に専念することを決める。彼が在籍した頃、そこでは以下のようなテーマが採り上げられたと言う。1903年秋学期、因果性に関する諸説 (デカルト、スピノザ、ヒューム、カント、ジクヴァルト) およびヒュームとカントの認識論の比較研究。—1904年春学期、生理と心理の相互関係。—1904年秋学期、認識論の根本問題 (バークリ、カント、スペンサー、マッハ、アヴェナリウス)。こうした研究活動を通じて、シュペートは哲学への入門を果たし、哲学者として立つための基盤を固めていった⁸。

1905年にシュペートは大学を卒業する。だが、とりわけ成績優秀であった彼は教授資格取得のために哲学講座に残ることを許される。卒業論文は、彼が1903年の秋学期にゼミナールで行ったいくつかの報告をもとにして書かれた労作「ヒュームとカントにおける因果性の問題」であった。周到な準備に基づく、この大きな学説研究論文は、彼の初めての著作 (単行本) として1907年に出版された (『ヒュームとカントにおける因果性の問題 —カントはヒュームの疑念に答えたのか』⁹)⁹。

大学卒業後、しばらくの間シュペートは、キエフの私立ギムナジウムや高等女子学校で教壇に立った。かつての政治的立場のせいで、官立学校で教えることを禁じられていたからである。だが1907年、彼はキエフを離れ、モスクワに移り住むことになる。彼の恩師チェルパーノフが、1906年にキエフを後にし、翌1907年からモスクワ大学教授を務めており、この人が最も有望な教え子であるシュペートを自身の新たな拠点モスクワへと呼び寄せたためである。こうしてシュペートはモスクワ大学派遣生の資格で、同大学において学位取得の準備を進めていくことになる。

二つの革命の狭間にあたるこの時期は文化的高揚期であった。シュペートはモスクワで多くの文化人と親交を持つようになる。彼が特に好んだのはA. ベールイ (А.Бельй) らの文学サークル「ムーサゲテース (アポロン)」らしい。こうした交友関係において、彼は頭脳明晰な批評家であり、稀有な博識の持ち主であり、激烈な論争家であり、そして変人であったと言う。一方でシュペートはモスクワのいくつかの高等教育機関において教授活動に携わっている。モスクワへ来た当初の1907年から彼は高等女子学校や教育学校で教壇に立っていたが、1909年からはシャニャフスキー人民大学でも教え始めていた。さらに1910年、彼はモスクワ大学で学位試験に合格し、それに伴い同大学の私講師に任命され、そこでも授業を受け持つようになった。

ところで1910年の夏、シュペートはベルリンで短期国外研修を行っている。彼は当地の図書館に通い、学位論文の準備を進めた。また、おそらくはこの研修と併せてであると思われるのだが、同時期にシュペートは、師のチェルパーノフに伴われて、ドイツ各地の大学の心理学実験室を訪れている。この視察は、当時チェルパーノフがモスクワ大学内に心理学研究所を設立しようと活動していたために行われたもので、チェルパーノフはシュペートの協力を待みにしていたらしい (研究所は1914年に設立された)。二人が訪問したのは、ライプツィヒ大学、ボン大学、ヴェルツブルク大学、ベルリン大学の実験室であった。

だが、国外研修はこれに尽きるわけではなく、翌1911年夏、シュペートは再度ベルリンで研修を行っている。この時も前回同様、彼は図書館で学位論文の準備に励んだ。また、この年シュペートは、大学等での講義を活字化した論文「ヒュームの懐疑論と独断論」を発表している¹⁰。

さらに1912年4月、シュペートは三度目の研修に臨む。今回の行き先は代わってゲッチンゲン大学である。やはり学位論文のための作業が主たる目的であった。この時の研修はやや長く続けられ、シュペートは8月半ばになってようやく帰国する。しかし、夏をモスクワで過ごす、9月に彼はゲッチンゲンに戻り、研修を再開している。これ以降の研修は長期にわたり、翌13年の秋まで続けられることになる¹¹。この頃発表されたシュペートの仕事として、先の心理学実験室歴訪の成果が見られる論文「心理学の一つの道、それはどこに通じるのか」がある¹²。

シュペートがゲッチンゲン大学を選んだのは、当時そこでE.フッサール (E.Husserl) が教鞭をとっていたからであった。シュペートがフッサールの知遇を得たのは1912年の10月頃であるらしい。以後13年の夏まで、彼はフッサールのゼミナールや講義に出席する。ただし、当初彼はフッサールからそれほど密な指導を受けていないようである。最初のうちは、外国からの一研修生として、高名な哲学者の説を謹聴するといったところだったのかもしれない。この他シュペートは、M.シェーラー (M.Scheler) が当時ゲッチンゲン大学で行っていた私的な講義なども聞いたと言う。

ゲッチンゲンに腰を落ち着けてから1年が過ぎ、1913年の夏になっても、シュペートはまだ帰国しようとしなかった。この年の7月、彼はゲッチンゲンからイギリスへ渡り、エディンバラおよびロンドンの図書館で資料収集を行っている。しかも8月末になると、彼はゲッチンゲンへと舞い戻り、そこでしばらく研修を続行する。こうしてさらに1ヶ月余りが過ぎ、彼がようやく帰国の途に着いたのは10月初めのことであった¹³。

帰国直後もシュペートが仕事の手を休めることはなかった。彼にはすぐさま実現したい計画があったからである。それはフッサール現象学をロシアに本格的に紹介するという仕事であった。この計画の大きな柱として彼が試みたのが、1913年4月に出されたフッサールの最新作『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』第1巻 (『イデーニ I』) の詳細な解説書の執筆である。シュペートはこれを成功させるべく、13年の終り以降、フッサールに何度か手紙を出し、その中で『イデーニ I』に関する質問を行っている。これらに対しフッサールは返信で丁寧に答え、こうして14年5月、『現象と意味 ―根本学としての現象学とその諸問題』が完成した¹⁴。ところで、それからほどない7月、シュペートはゲッチンゲンを訪れている。この時、彼はいく度かフッサールの自宅を訪問しており、この哲学者と長時間会見する機会を持った。二人はくつろいだ雰囲気の中、親しく言葉を交わしたと言う。『現象と意味』もいくらかは話題に上ったようである。しかしながら残念なことに、シュペートとフッサールが会ったのはこれが最後である。彼らは共に再会を望んでいたにちがいないが、結局、以後二人が相見ることにはなかった。

シュペートは1915年頃から学位取得に本腰を入れる。彼はこの年、学位論文の一部をなす論考を立て続けに二つ発表している¹⁵。そして翌16年、『論理学の問題としての歴史』第1巻を提出し、これの公開審査に合格する¹⁶。こうして彼は学位を取得し、またこれに伴いモスクワの高等女子学校教授およびモスクワ大学助教授に就任した。16年に発表された他の重要な著作として、論文「意識とその所有者」がある¹⁷。

17年の革命が大学の状況をすぐさま大きく変えるということにはなかつたようである。モスクワ大学でシュペートは、当座のところ前とさほど変わらぬ研究・教育活動を続けており、18年には教授に就任している。この頃の彼の仕事の中で特筆すべきものと言えば、それは自身が編集する哲学年刊誌『思想と言葉』を17年に創刊したことであろう。ただし、この雑誌は18年から21年の間に第2号が出た時点で早くも途絶えることになるのだけれども¹⁸。この他18年にシュペートは、『論理学の問題としての歴史』の続巻(第3巻)の一部となる論文「解釈学とその諸問題」を書き上げている。これは当時発表されぬままに措かれ、1989年になってようやく公になり、そのテーマの先駆性のゆえに大きな反響を呼んだ著作である¹⁹。

1919年から20年にかけて、シュペートはモスクワ言語学サークルの活動に参加している。そのメンバーには、R. O. ヤコブソン (P. O. Якобсон)、G. O. ヴィノクール (Г. O. Винокур)、R. O. ショール (P. O. Шор) などがいた。シュペートの思想は彼らの間に反響を呼び起こし、一定数の熱心な支持者さえ獲得したと言う。さらにまた、モスクワ大学の教え子たちのうちにもシュペートに付き随う者が現れ始めていた。こうして、この頃から徐々に「シュペート学派」とでも言うべきものが形成されていった。1920年、シュペートは自身の哲学に同調する若い研究者たちを結集するために、モスクワ大学内に民族学研究室を開設した。

シュペートは上の研究室を自分の研究・教育活動の拠点にする心積もりであつたに違いない。しかし、激変する時代の状況はそれを許さなかつた。1921年、チェルパーノフら他の教授たちとともに、シュペートはモスクワ大学での教職から追放される。しかし一方で、彼はこの年、同年に創設された「科学的哲学研究所 (Институт научной философии)」(ソ連科学アカデミー哲学研究所の母体)の初代所長に選出されている(23年まで現職)。これに加えて、彼はこの年、やはり同年創設の「ロシア芸術学アカデミー (Российская академия художественных наук)」(後、25年に「国立芸術学アカデミー (Государственная академия художественных наук)」へ改組・改称)の会員にも選ばれている。この頃の彼の立場は、良いとも悪いともつかぬ微妙なものであつたようだ。

1922年、非マルクス主義系知識人の大規模な国外追放が計画される。追放者リストにはシュペートの名もあつた。だが、彼はあらゆる手を尽くして革命後のロシアにとどまろうとする。結局、キエフ時代からの知己であるルナチャルスキーが手を貸し、シュペートの名前はリストから除外されることになる。また同年、シュペートは上記アカデミー内に哲学部門を創設し、ここでの研究の指導者となっている(25年まで)。彼は自身の活動拠点を確立することをあきらめたわけではなかつた。

1924年、シュペートはアカデミーの副総裁に就任する。総裁は形式的にその地位にいるだけの人物であり、したがって、この時点以降シュペートがアカデミーの事実上の指導者であつた。彼は自分の哲学の支持者や非マルクス主義系の知識人をアカデミーに集め、彼らと協力しつつ、盛んな研究活動を行っていく。1920年代、つまりアカデミー時代におけるシュペートの著作を次に列挙しておく。—22年、『論理学の問題としての歴史』の続巻(第3巻)の序説となるはずだった論考「論理学の対象としての歴史」、—22年、「芸術としての演劇」、—22年から23年にかけて『美学断章』第1部から第3部まで、—23年、『美学断章』第4部とみなされるべき論文「現代美学の諸問題」、—27年、『民族心理学序説』第1部、—27年、『言葉の内部形式』²⁰。また、以

上とは別系列をなす著作として、シュペートはこの時期に以下のようなロシア哲学史の叙述を試みている。—21年、『ゲルツェンの哲学的世界観』、—22年、「哲学史の観点から見たラヴロフの人間主義」、—22年、『ロシア哲学の発展の概観』第1部²¹。

シュペートを取り巻く状況は好転したかのように思われた。だが、現実は苛酷であった。やがてシュペートと国立芸術学アカデミーは肅正の波に飲み込まれていく。28年頃からシュペートは思想上の偏向を疑われるようになり、29年、副総裁の職を解かれる。これと同時にアカデミーも解体され、別組織へと仕立て直されてしまった。

翌1930年、シュペートはアカデミーを「観念論者の巣窟」として罪を問われ、一切の思想的活動を禁じられる。彼が哲学を続けていくことは、少なくとも公式にはもはや不可能であった。シュペートは奔走の末、文学作品の翻訳に従事することをようやく許される。彼が手掛けたのは、ディケンズ、バイロン、サッカレーなどの作品の翻訳や、それらへの注釈であった。32年、シュペートは、K. S. スタニスラフスキー (К.С.Станиславский) の招きにより、「高等演技技術アカデミー (Академия высшего актерского мастерства)」の教授となっている。

1935年春、シュペートは逮捕される。同じ頃、国立芸術学アカデミーの他のいく人かのメンバーも逮捕されている。夏になってシュペートに下された判決は比較的軽いものであり、シベリアのエニセイスクへの5年間の流刑であった。家族を同行し、自分で家を購入して住むことも認められた。だが妻のナタリヤは、夫が仕事をしやすいよう彼を大学街であるトムスクへ移そうと図る。彼女はしばしばモスクワへ出向き、様々な手段を講じた。

ナタリヤの尽力が効を奏し、シュペートと彼の家族はトムスクへと移り住むことを許される。1935年の末から36年の始めにかけて、彼らは新居へ越していった。もともと、シュペートが哲学研究を行うことはトムスクでも禁じられたままであったが。しかしながら、彼は当地の大学と仕事の契約を結ぶことができたらしい。その一つにヘーゲルの『精神現象学』の露訳があった。この翻訳は1959年に出版されている²²。だが、これが彼の最後の仕事となった。

1937年10月27日、彼は再び逮捕される。今回彼に言い渡された判決は「10年間の拘束、文通不許可」であった。これ以降シュペートの消息は不明となる。その間ナタリヤは刑の見直しを何度となく嘆願しているが、それはいつでも退けられた。

1956年、ナタリヤは一通の書類を受け取る。そこではシュペートの冤罪が認められており、こうして彼の名誉回復がなされた。けれども、そこにはまた、彼は1940年、肺炎によって死亡したと記されてあった。

シュペートの死に関する事実が明らかにされたのは1990年のことである²³。彼が1940年に病死したというのは偽りであった。実際には二度目の逮捕から間もない1937年11月16日、彼は銃殺されたのであった。

¹ 以下の記述は、主として次に示すシュペートに関する伝記資料・研究に基づく。記述の各部分が、それらのうちどれに依拠しているかについては、特に必要があると思われる場合にのみ指示する。

なお、ここで予め断っておくが、シュペートの伝記研究はまだ発展途上にあり、以下の記述はあくまで暫定的なものにとどまらざるをえない。

Пастернак Е.В. Памяти Густава Густавовича Шпета // Вопросы философии. 1988. №11. с.72-76.

Пастернак Е.В. Г.Г.Шпет // Шпет Г.Г. Сочинения. М., 1989. с.3-8.

- Поливанов М.К. О судьбе Г.Г.Шпета // Вопросы философии. 1990. №6. с.160-164.
- Поливанов М.К. Очерк биографии Г.Г.Шпета // Начала. 1992. №1. с.4-25.
- Поливанов М.К. Густав Шпет // Шпет Г.Г. Философские этюды. М., 1994. с.3-19.
- Поливанов М.К. Жизнь и труды Г.Г.Шпета // Шпет в Сибири: ссылка и гибель. Томск, 1995. с.5-15.
- Шторх М.Г. - Крейзер Э.И. Обмен открытыми письмами // Логос. 1996. №7. с.212-218.
- Северцева О.С. Г.Г.Шпет: Фрагменты биографии // Густав Густавович Шпет. Архивные материалы. Воспоминания. Статья. М., 2000. с.170-195.
- Щедрина Т.Г. "Я пишу как эхо другого..." Очерки интеллектуальной биографии Г. Шпета. М., 2004.
- 2 シュペートの名前には別の表記がある。1913年頃まで彼は Шпет ではなく、母親や親族と同じように Шпетт という綴りを採っていた。そのためドイツ語で名前を記す際に彼は Gustav von Spett と書いている。
- "Gustav von Spett", *Husserliana Dokumente*. Bd. III: *Briefwechsel*. Teil 3: *Die Göttinger Schule*. Dordrecht: Boston: London: Kluwer Academic Publishers, 1994. S.525-544.
- 3 Поливанов М.К. Очерк биографии Г.Г.Шпета // Начала. 1992. №1. С.6.
- 4 Поливанов М.К. Жизнь и труды Г.Г.Шпета // Шпет в Сибири : ссылка и гибель. Томск, 1995. С.8.
- 5 Шторх М.Г. - Крейзер Э.И. Обмен открытыми письмами // Логос. 1996. №7. С.213.
- 6 このためにシュペートは、ヤン (イヴァン) ないしボレスラフを父称に使って、グスタフ・イヴァノヴィッチ (Густав Иванович) ないしグスタフ・ボレスラヴォヴィッチ (Густав Болеславович) と名のつたこともあるようである。
- 7 Отчет о деятельности Психологической семинарии при университете св. Владимира за 1902–1906 годы // Философские исследования. Киев, 1907. Т.1. Вып.4. Паг.3. с.2.
- ただし引用は次による。
- Поливанов М.К. Очерк биографии Г.Г.Шпета // Начала. 1992. №1. с.7–8.
- 8 多忙な研究生活の一方で、1904年にシュペートはマリヤ・アレクサンドロヴナ・クレストフスカヤ (Мария Александровна Крестовская) と結婚している。マリヤは舞台女優であり、シュペートより9歳年上であった。
- 9 Шпетт Г.Г. Проблема причинности у Юма и Канта. Ответил ли Кант на сомнения Юма? Киев, 1907.
- 10 Шпетт Г.Г. Скептицизм и догматизм Юма // Вопросы философии и психологии. 1911. Кн. I (106). с.1-18.
- 11 一度目のゲッチンゲンでの研修の間に、シュペートは離婚した。だが、その時すでに彼には再婚の意志があり、その相手はかつての教え子のナタリヤ・コンスタンチノヴナ・グチュコヴァ (Наталья Константиновна Гучкова) であった。12年の夏、一時帰国した際、シュペートはナタリヤの家の領地でしばらく過ごしている。その後、再びゲッチンゲンへ戻ったのである。
- 12 Шпетт Г.Г. Один путь психологии и куда он ведет // Философский сборник. Льву Михайловичу Лопатину к тридцатилетию научно-педагогической деятельности от Московского психологического общества. 1881-1911. М., 1912. с.245-264.
- 13 帰国してまもなく、13年の11月半ば、シュペートはナタリヤと再婚している。だが、11月の後半にはすでにパリを訪れている。ここでも彼は研究に従事しているのだが、その際ナタリヤが一緒だったか、いつ帰国したか等々、これらについて筆者は確実なところを知らない。
- 14 Шпет Г.Г. Явление и смысл. Феноменология как основная наука и ее проблемы. М., 1914.
- また、『現象と意味』執筆時にシュペートとフッサールの間で取り交わされた書簡は以下に収録されている。
- "Gustav von Shpet", *Husserliana Dokumente*. Bd. III: *Briefwechsel*. Teil 3: *Die Göttinger Schule*. Dordrecht: Boston: London: Kluwer Academic Publishers, 1994. S.525-544.
- ところでシュペートは、上に収録されている書簡"von Spett an Husserl, 11. III. 1914."の末尾において、『現象と意味』にフッサールと彼の妻への献辞を添えることを承諾してくれるようフッサールに請うている。これに対しフッサールは、書簡"Husserl an von Spett, 28. III. 1914."の最後で答え、事はひとえに学問に関する以上、妻への献辞は辞退すること、一方、自分へのそれは喜んで受けることをシュペートに伝えている。こうして、『現象と意味』の冒頭には「Edmund Professor Husserl zu herzlicher Verehrung zugeeignet」という言葉が置かれることになった。
- 15 Шпет Г.Г. К истории рационализма XVIII века. (отрывок) // Вопросы философии и психологии. 1915. Кн. I (126). с.1-61. (「18世紀理性主義の歴史について (一断片)」)
- Шпет Г.Г. Первый опыт логики исторических наук. К истории рационализма XVIII века // Вопросы философии и психологии. 1915. Кн. III (128). с.378-438. (「歴史的諸学の論理学の最初の試み —18世紀理性主義の歴史について」)
- 16 Шпет Г.Г. История как проблема логики. Критические и методологические исследования. Ч.1: Материалы. М., 1916.
- また、公開審査での弁論を文章化した論文が、同じ16年に発表されている。
- Шпет Г.Г. Философия и история // Вопросы философии и психологии. 1916. Кн. IV (134). с.427-439. (「哲

学と歴史」)

- 17 Шпет Г.Г. Сознание и его собственник. (Заметки). М., 1916.
- 18 Мысль и слово. Философский ежегодник. Т.1. М., 1917.
Мысль и слово. Философский ежегодник. Т.2. М., 1918-1921.
- 19 Шпет Г.Г. Герменевтика и ее проблемы // Контекст 1989. М., 1989. с.231-268; Контекст 1990. М., 1990. с.219-259; Контекст 1991. М., 1991. с.215-255; Контекст 1992. М., 1993. с.251-284.
- 20 Шпет Г.Г. История как предмет логики // Научные известия. Сб.2. М., 1922.
Шпет Г.Г. Театр как искусство // Мастерство театра. 1922. №1. с.31-55.
Шпет Г.Г. Эстетические фрагменты. Вып.1-3. Пг., 1922-1923.
Шпет Г.Г. Проблемы современной эстетики // Искусство. 1923. №1. с.43-78.
Шпет Г.Г. Введение в этническую психологию. Вып.1. М., 1927.
Шпет Г.Г. Внутренняя форма слова. Этюды и вариации на темы Гумбольдта. М., 1927.
- 21 Шпет Г.Г. Философское мировоззрение Герцена. Пг., 1921.
Шпет Г.Г. Антропологизм Лавлова в свете истории философии // П.Л.Лавлов: Статьи. Воспоминания. Материалы. Пг., 1922. с.73-138.
Шпет Г.Г. Очерк развития русской философии. Ч.1. Пг., 1922.
- 22 Гегель Феноменология Духа. Пер. с нем. Г.Шпета // Гегель. Соч. В 14 т. Т.4. М., 1959.
- 23 Поливанов М.К. О судьбе Г.Г.Шпета // Вопросы философии. 1990. №6. с.163-164.

2. 先行研究史

ここでの我々の課題は、これまで行われてきたシュペート研究を網羅的に回収することではない。我々が試みるのは、死後長らくほとんど忘れられていたシュペートの思想が次第に再評価されるようになる過程を素描すること、これのみである。

2-1. 同時代人評

回想記

シュペートは自伝の類を著わすことがなかった。そのため、生前の彼について知るには、同時代人の証言によるしかない。しかし、当時のロシアの知識人たちの中で、回想記等においてシュペートに言及した者は多くない。その頃のシュペートの知名度を思うと、これは意外なことと言えよう。数少ない証言のうち最も重要なのが A. ベールイの『二つの革命の狭間で』(1) である。ベールイはシュペートの人物についてまとまった記述を残した例外的な同時代人である。この他のものとしては、ロシアの新カント主義者として知られ、国際哲学雑誌『ロゴス』ロシア版の出版者の一人である F. A. ステプンが書いた回想記『在ったこと、実現しなかったこと』(2) を挙げておきたい。これはシュペートにとっての同時代に関する記録として貴重だからである。ただし、シュペートに関してステプンは、上記の雑誌出版に関して彼に助力を願ったところ色好い返事を得られなかった件を語りながら、ごく簡単に彼の肖像を描くのみである。

シュペートが登場する自伝的作品がいくつかある。B. L. パステルナークの『安全通行証』(3)、V. A. カヴェーリンの『灯がともる窓』(4)、D. A. グラーニンの『野牛』(5) がこれである。だが、これらにおいてもシュペートは、話のついでに触れられるエキストラにすぎない。

(1) *Бельй А. Между двух революций. М., 1990.*

(2) *Степун Ф.А. Бывшее и несбывшееся. Нью Йорк: Изд-во Чехова, 1956.*

(3) *Пастернак Б.Л. Охранная грамота. М., 1989.*

(4) *Каверин В.А. Освященные окна. М., 1976.*

(5) *Гранин Д.А. Зубр // Новый мир. 1987. №1. с.*

書評

同時代人によるシュペートの著作への書評もやはり数は多くない。そうした状況の中、ヴィゴツキーに影響を与えたことで知られる哲学者で心理学者の P. P. ブロンスキーが『現象と意味』(1914年)の書評(1)を15年に発表している。ブロンスキーは、シュペートと同じくキエフ大学でチェルパーノフに師事しており、モスクワではシュペートからも指導を受けたことがある。さて、そのチェルパーノフであるが、彼は教え子の学位論文『論理学の問題としての歴史』第1部(1916年)の書評(2)を16年に手がけている。また、イタリア哲学史の専門家で宗教哲学者の V. F. エルンも、同じ論文について17年に書いている(3)。エルンは将来を囑望される若手

で、シュペートの競争相手であったが、この年17年の内に死去している。死の直後、シュペートの方も19世紀イタリアの宗教哲学者に関するエルンの博士論文に答えた¹。

シュペートの20年代の著作に対する公の反応もごくわずかである。目につくところでは、後にソ連哲学の重鎮となるV.F.アスムスが27年に発表した『言葉の内部形式』(1927年)へのコメント(4)ぐらいのものである。これ以外では例えば、V.N.ヴォローシノフの29年刊の『マルクス主義と言語哲学—言語学における社会学的方法の基本問題』(5)、あるいはM.M.バフチンが35年に書き上げたが、当時は公刊されなかった「小説の言葉」(6)などが、シュペートの20年代の著作にかろうじて言及している²。

30年代以降、ソ連国内ではシュペートの業績はほぼ完全に黙殺された³。

- (1) *Блонский П.П.* Шпет Г.Г. Явление и смысл. Феноменология, как основная наука и ее проблемы // Голос Москвы. №65. 19 марта 1915 г.
- (2) *Челпанов Г.И.* Шпет Г.Г. История как проблема логики. Ч1. Материалы. М., 1916. // Вопросы философии и психологии. М., 1916. Кн.3(134). с.316-324.
- (3) *Эри В.Ф.* Проблема истории. По поводу диссертации Г.Г.Шпета «История как проблема логики» // Журнал министерства народного просвещения. 1917. №6.
- (4) *Асмус В.Ф.* Философия языка Вильгельма Гумбольдта в интерпретации профессора Г.Г.Шпета // Вестник коммунистической академии. 1927. №23. с.250-265.
- (5) *Волошинов В.Н.* Марксизм и философия языка. Основные проблемы социологического метода в науке о языке. Л., 1929.
- (6) *Бахтин М.М.* Слово в романе // Вопросы литературы и эстетики. М., 1975. с.72-233.

亡命ロシア人による批評

亡命したロシア知識人たちの間でも、シュペート哲学に目を向ける者は少なかった。例外としては、まずB.V.ヤコヴェンコが、1929年にドイツで発表したロシアにおけるフッサール受容に関する論文(1)において、シュペートの議論を取り上げている。ヤコヴェンコは、上述のステパン同様、ロシアの新カント主義者にして『ロゴス』の発起人であり、シュペートとは親しい間柄にあった。これに続くのが、「直観主義」を標榜する哲学者で、正教思想の支持者 N.O.ロスキーである。彼は51年にアメリカで公刊した『ロシア哲学史』(2)の中でシュペートに触れている。この著作は、ロシア哲学史の概説書としていまだに信頼されているものである。けれども残念ながら、シュペートに関する彼の記述はわずか数行にすぎず、実質的な紹介の域に達しているとは言えない。シュペートはロスキーの説に対して批判的であった⁴。そのためにロスキーは彼を軽んじたのであろうか。一方、正教会の神父であるV.V.ゼンコフスキーは、50年にフランスで出版した『ロシア哲学史』(3)においてシュペートのために一節を設けている。ロスキーの著書と共に、このロシア哲学史もまた定評のあるものである。しかし、大変遺憾ながら、そこで示されているシュペート哲学およびフッサール現象学の理解的を射たものとはまったく言い難い。そればかりか、その叙述にはシュペートに対する感情的な反撥が透けて見える。ゼンコフスキーはチエルパーノフの下で学んでおり、シュペートとは同門である。だが、シュペートはこの後輩の或る著

作を手厳しく批判する論文を 1914 年に発表している⁵。こうしたことがゼンコフスキーの悪感情の原因かもしれない。

- (1) Jakowenko B.V. "Edmund Husserl und die russische Philosophie", *Der russische Gedanke*, 1(2), 1929. S.210-212.
- (2) Lossky N.O. *History of Russian Philosophy*. New York: International Univ. Press, 1951.
- (3) *Зельковский В.В. История русской философии*. Ленинград, 1991. Т.2. Ч.2.

2-2. シュペート・ルネサンス (1980 年代)

<国内>

シュペートは長い間埋もれたままであった。伝記で述べたように、1956 年、彼の名誉回復がなされたが、それでも彼の業績への関心が高まるということにはなかった。彼はすでに忘れ去られたかのようにであった。だが、70 年代に入るとシュペート再評価の兆しが現れる。上述のアスムスが 1970 年刊の『哲学百科事典』における一項目「シュペート」(1)を執筆するのである。これはそれまで無視され続けて来たシュペート哲学がようやく認められ始めたことを示す出来事であろう。ただし、アスムスによるシュペート評価は必ずしも芳しいものとは言えない。さて、さらなる先触れとして特筆すべきは、モスクワ・タルトゥ学派の V.V. イヴァーノフが 73 年公刊の『簡易文学百科事典』に記した「シュペート」(2)である。また、同じ著者が 76 年の『ソ連記号論史概説』(3)で示したシュペートへの高い評価も大きな意義を有する。イヴァーノフの紹介によって、シュペートは最初、哲学者というよりはロシア記号論運動の先駆者として認知される。

70 年代のこのような前兆の後、80 年代の終りには本格的なシュペート復活の時節が訪れる。この時期最も重要な出版物と言え、それは第一に、シュペートの孫娘 E.V. パステルナーク (最初の妻の長女の娘) の手になる一文「グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペートの思い出」(4)であろう。これは 88 年にソ連の公式哲学誌とでも言うべき『哲学の諸問題』に掲載された。この小文の中でパステルナークはシュペートの生涯と業績の全般を語りながら、人々が彼の記憶を取り戻すよう訴えている。第二に挙げるべきは 89 年公刊の『シュペート著作集』(5)である。これは『哲学の諸問題』の付録、叢書「祖国哲学思想の歴史より」の中の一冊として出版されている。このことはシュペートの著作がロシア哲学史上の古典として認められたことを意味すると言えよう。著作集には、パステルナークの紹介文と共に、『ロシア哲学の発展の概観』第 1 巻 (1922 年)、『美学断章』第 1 部—第 3 部 (1922-23 年)、『民族心理学序説』第 1 部 (1927 年) が収録されている。

こうした動きと平行して、ちょうどこの頃、シュペートに関する専門的研究も現れる。その主たるものが A.A. ミチューシンの諸論文ある。彼はすでに 78 年に『ソヴィエト大百科事典』の「シュペート」(6)を担当しており、また、82 年にはタルトゥ大学紀要『記号体系論集』の上で、序文を付しつつ (7)、シュペートの遺稿「文学」を公にしていた (8)。その彼が 80 年代末になると、民族心理学への興味を軸に据えながら、シュペートの思想を精力的に論ずるようになる

のである（9、10、11、12）。ミチューシンがこれら論文を発表したことで、シュペート再評価の流れは勢いを増したと言える。しかしながら、シュペートに対するフッサールの影響の軽視、シュペートをロシア宗教思想の潮流と結びつけようとする傾向などは、ミチューシンの研究の欠点として後続の研究者たちによって批判されている。

- (1) *Асмус В.Ф.* Шпет, Г.Г. // *Философская энциклопедия*. Т.5. М., 1970. с.519-520.
- (2) *Иванов В.В.* Шпет, Г.Г. // *Краткая литературная энциклопедия*. Т.8. М., 1975. с.782-783.
- (3) *Иванов В.В.* *Очерки по истории семиотики в СССР*. М., 1976.
- (4) *Пастернак Е.В.* Памяти Густава Густавовича Шпета // *Вопросы философии*. 1988. №11. с.72-76.
- (5) *Шпет Г.Г.* *Сочинения*. М., 1989.
- (6) *Митюшин А.А.* Шпет Г.Г. // *Большая советская энциклопедия*. Т.29. М., 1978. с.469.
- (7) *Митюшин А.А.* О статье Г.Шпета «Литература» // *Ученые записки Тартуского государственного университета «Труды по знаковым системам»* Т.15. Тарту, 1982. с.149.
- (8) *Шпет Г.Г.* Литература // *Ученые записки Тартуского государственного университета "Труды по знаковым системам"* Т.15. Тарту, 1982. с.150-158.
- (9) *Митюшин А.А.* Г.Шпет и его место в истории отечественной психологии // *Вестник Московского университета*. Серия 14: Психология. 1988. №2. с.33-42.
- (10) *Митюшин А.А.* Творчество Г.Шпета и проблема истолкования действительности // *Вопросы философии*. 1988. №11. с.93-107.
- (11) *Митюшин А.А.* Из архива Густава Шпета. Вопросы исторического познания и полемика с Баденской школой // *Вопросы истории естествознания и техники*. 1988. №3. с.114-128.
- (12) *Митюшин А.А.* Принципы этнической психологии в трактовке Г.Г.Шпета // *Советская этнография*. 1989. №6. с.67-75.

<国外>

ロシアと同様、西欧においても、シュペートが注目されるようになったのは80年代になってからのことである。しかし、そこでも前兆と呼べるものがあつた。最も早い時期にシュペート哲学を指し示したのは、55年にアメリカで出版されたV. エーリッヒの『ロシア・フォルマリズム — 歴史と原則』（1）である。この著書はフォルマリズム研究の古典的名作として知られるが、この中でエーリッヒは、モスクワ言語学サークルのメンバーたちのフッサールへの傾倒はシュペートの影響によると指摘した。これに続くのが、同サークルでシュペートと交流を持ったヤコブソンである。彼は、71年公刊の『選集Ⅱ：言葉と言語』に収められた「回顧」（2）において、エーリッヒの指摘を裏付けるかのように、サークル内のフッサールおよびA. マルティ（Anton Marty）に関する議論を指導したのは「フッサールがその最も優れた弟子の一人とみなしていた」シュペートである、と証言している。さらに付け加えておけば、ハーヴァード大学でヤコブソンに師事した経験を持つドイツのE. ホーレンシュタインも、76年の『言語学、記号学、解釈学 — 構造現象学のための弁論』（3）の中で、モスクワのサークルにおけるシュペートの影響力について語っている。また、A. A. ハンゼン＝レーフェが78年にオーストリアで出版した『ロシア・フォ

ルマリズム —異化原理からの展開の方法論的再構築』(4)においても、シュペートへの言及が見られる。これらの著作を通じてシュペートは少なくともその存在だけは知られるようになった。

以上のような示唆に促されて、80年代にはシュペート哲学を主題とする研究論文が発表され始める。それらの中ではまず、アメリカのE.フライベルガーに触れねばなるまい。彼女は83年の「哲学的言語学 —W.v.フンボルトとG.G.シュペート(内部形式の記号理論)」(5)、およびこれに続くいくつかの論文や報告によって、シュペート言語思想の紹介に努めた。彼女の仕事はいわば宣伝の役割を果たしたのであり、この点での彼女の功績は小さくない。しかし、本格的なシュペート研究に先鞭をつけたのは、やはりドイツのA.ハールトであろう。彼は88年の「グスタフ・シュペートにおける現象学と構造言語分析 —20世紀のロシア的フッサール解釈について」(6)を皮切りに、続く90年代には格別に重要な研究を世に送り出すことになる。彼の仕事については後でもう一度述べることにしよう。

もう一人、特に留意すべき論者を挙げておく。それはドイツのF.ローディである。彼はO.F.ボルノウ(Otto Friedrich Bollnow)の弟子であり、師と並んで80年代「ディルタイ・ルネサンス」の立役者として著名である⁶。このローディが少なからぬ関心をシュペートに寄せており、86年にはドイツで国際シンポジウム「シュペート —業績と影響(Spet – Werke und Wirkung)」を主催し⁷、続いて89年には論文「現象学の圏内における解釈学的論理学 —ゲオルグ・ミッシェ、ハンス・リップス、グスタフ・シュペート」(7)を発表しているのである。現代ディルタイ研究の第一人者によるシュペート論の登場は、現象学や構造主義ばかりでなく、解釈学とシュペートとの関係もまた、真剣な考察に価するテーマたりうることを証明したと言えよう。

これらの他には、アメリカのP.スタイナーが、84年の『ロシア・フォルマリズム —ひとつのメタ詩学』(8)においてシュペートに一瞥をくれている。彼はまた、88年発表の『中心と周縁 —ブリュッセル、プラハとヨーロッパの文化空間』の一部を割いて、「シュペートとプラハ学派」(9)を論じている。

(1) Erlich V. *Russian Formalism. History – Doctrine*. The Hague: Mouton, 1955.

(2) Jakobson R.O. "Retrospect", *Selected Writings II, Word and Language*. The Hague: Mouton, 1971. pp.711-722.

(3) Holenstein E. *Linguistik, Semiotik, Hermeneutik. Plädoyers für eine strukturelle Phänomenologie*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1976.

(4) Hansen-Löve A.A. *Der russische Formalismus. Methodologische Rekonstruktion seiner Entwicklung aus dem Prinzip der Verfremdung*. Wien, 1978.

(5) Freiburger E. "Philosophical Linguistics : W.v.Humboldt and G.G.Shpet (A Semiotic Theory of Inner Form)", *Penn. Review of Linguistics*. Vol.7. 1983. pp.95-105.

(6) Haardt A. "Phänomenologie und strukturelle Sprachanalyse bei Gustav Spet. Zur russischen Husserl – Interpretation der zwanziger Jahre", *Sprache, Wirklichkeit, Bewußtsein*. Freiburg; München: Karl Alber, 1988. S.167-198.

(7) Rodi F. "Hermeneutische Logik im Umfeld der Phänomenologie: Georg Misch, Hans Lipps, Gustav Spet", *Phänomenologie im Wiederstreit. Zum 50. Todestag Edm. Husserls*. Frankfurt a. M.:

Suhrkamp, 1989. S.352-372.

(8) Steiner P. *Russian Formalism. A Metapoetics*. Ithaca: London: Cornell Univ. Press, 1984.

(9) Steiner P. *Centers et Peripheries: Bruxelles, Prague et l'espace culturel europeen*. Liege: R.Vervinckt, 1988.

2-3. 現在 (1990 年代以降)

<国内>

著作出版

ソ連崩壊以後、90 年代以降のロシアにおけるシュペート研究は、活気のある、だが単なる流行現象とも違う、堅実な様相を呈する。この時期にまず目立つのはリプリントやアーカイヴ資料の相次ぐ出版である。主だったところを列挙すると次のようになる。

—89 年から 92 年にかけて、遺稿「解釈学とその諸問題」の公刊 (1)。

—94 年、著作集『哲学習作』(2):『意識とその所有者』(1916 年)、「懐疑主義者とその心」(1918-21 年)、「智恵か理性か」(1917 年)を収録。

—95 年、『ディルタイに関する二つのテキスト』(3): シュペートとハイデガーのディルタイ論を併録。シュペートの論は遺稿『論理学の問題としての歴史』第 2 部の第 7 章「ヴィルヘルム・ディルタイ」。

—96 年、『現象と意味』(1914 年)の再版 (4)。

—96 年、著作集『社会的存在の心理学』(5): 「現代美学の諸問題」(1923 年)、『言葉の内部形式』(1927 年)等を収録。

—99 年、『言葉の内部形式』の再版 (6)。

—02 年、『論理学の問題としての歴史』第 1 部および第 2 部 (7): 第 1 部は 1916 年出版の再版。それに加えて遺稿第 2 部のすべてを公刊。

こういった具合で、かつて出版された著作ばかりでなく、生前には発表されなかった稿までも容易に参照できるようになった。

(1) Шпет Г.Г. Герменевтика и ее проблемы // Контекст 1989. М., 1989. с.231-268; Контекст 1990. М., 1990. с.219-259; Контекст 1991. М., 1991. с.215-255; Контекст 1992. М., 1993. с.251-284.

(2) Шпет Г.Г. Философские этюды. М., 1994.

(3) Шпет Г.Г., Хайдеггер М. Два текста о Вильгельме Дильтее. М., 1995.

(4) Шпет Г.Г. Явление и смысл. Феноменология как основная наука и ее проблемы. Томск, 1996.

(5) Шпет Г.Г. Психология социального бытия. Воронеж, 1996.

(6) Шпет Г.Г. Внутренняя форма слова. Этюды и вариации на темы Гумбольдта. Иваново, 1999.

(7) Шпет Г.Г. История как проблема логики. Критические и методологические исследования. Материалы. В двух частях. М., 2002.

伝記研究

次に目につくのは伝記研究の進歩である。これに貢献したのは主としてシュペートの血縁者たちであった。シュペートの孫 M.K. ポリヴァーノフ（最初の妻の次女の息子）は、90年の「G.G. シュペートの運命について」（1）において、祖父の死の実際を明らかにした。37年10月27日に流刑地トムスクで再逮捕されて以降、シュペートがいつ、どこで、どのようにして死亡したかについては、長いこと確かなところが分からなかった。56年に彼の「名誉回復」がなされた際、40年3月23日にトムスクで肺炎によって死亡した旨が遺族に通知され、一応この公式データが信じられていた。しかし、ポリヴァーノフがトムスクで関連文書を調査したところ、その通知内容は死亡地を除いては虚偽であることが判明したのである。実際にはシュペートは、すでに記したように、再逮捕直後の37年11月16日、正当な裁判を受けぬまま、銃殺刑に処されたのであった。ポリヴァーノフはこの他、92年に「G.G. シュペートのバイオグラフィーの概観」（2）を発表している。この伝記は、前に触れたパステルナークの89年の小文に比べると、かなり詳細なものとなっている。しかし、この伝記作品に対しては、シュペートの娘のM.G. シュトルフ（二度目の妻の次女）が96年の公開往復書簡（3）の中で異を唱えている。彼女によれば、ポリヴァーノフの記述にはいくつかの誤りがあるらしい。

ともかく、このような次第で、シュペートにまつわる諸事実は血縁者たちの努力によって以前よりずっと詳しく明らかになった。しかし、あえて厳しい評価を下すならば、それら伝記研究はいまだに肉親や親族の思い出話の域を出ていないとも言える。けれども、その一方で、90年発表のV.F. プスタルナコフ著「十月革命直後期（1917年末—1921年半ば）のソヴィエト・ロシアにおける哲学思想」（4）、95年のL.A. コーガン著「読まれざるページ —G.G. シュペート、科学的哲学研究所所長（1921年—1923年）」（5）、2000年のO.S. セヴェルツェヴァ著「国立芸術学アカデミー研究員審理資料への注釈」（6）といった仕事も現れている。今後こうした方向での研究の進展が期待される⁸。

(1) *Поливанов М.К.* О судьбе Г.Г.Шпета // *Вопросы философии*. 1990. №6. с.160-164.

(2) *Поливанов М.К.* Очерк биографии Г.Г.Шпета // *Начала*. 1992. №1. с.4-25.

(3) *Шторх М.Г. – Крейзер Э.И.* Обмен открытыми письмами // *Логос*. 1996. №7. с.212-218.

(4) *Пустарнаков В.Ф.* Философская мысль в Советской России в первые годы после Октября (конец 1917 – середина 1921 г.) // *Отечественная философия: опыт, проблемы, ориентиры и исследования*. Сборник. М., 1990. Вып. III: Послеоктябрьский период. с.4-55.

(5) *Коган Л.А.* Непрочитанная страница. Г.Г.Шпет – директор Института научной философии: 1921–1923 // *Вопросы философии*. 1995. №10. с.95-105.

(6) *Северцева О.С.* Комментарии к материалам следственных дел сотрудников ГАХН // *Густав Густавович Шпет. Архивные материалы. Воспоминания. Статья*. М., 2000. с.31-40.

学説研究

90年代以降、ロシアにおけるシュペート研究の中心を担うようになったのは現象学・解釈学研

究者たちである。これら研究者はソ連解体後のロシアで急速に勢力を拡大した。その彼らが、西欧の現象学的哲学を摂取しようと努める傍ら、自国におけるフッサール受容の先達であるシュペートにも大きな関心を払っているのである。彼らの活動拠点には出版社「グノーシス (Гнозис)」と雑誌『ロゴス (Логос)』である。シュペートの著作の出版について言えば、「グノーシス」社は前述の『ディルタイに関する二つのテキスト』を刊行している。だが、シュペート研究への貢献の点では、『ロゴス』誌がより重要であろう。20世紀初めの国際哲学雑誌『ロゴス』ロシア版についてはすでに触れた。今述べている『ロゴス』誌は、この雑誌を91年に復刊したものである。それ以来この新生『ロゴス』誌の上で、シュペートの遺稿や書簡、彼に関する研究論文などがいくつも発表された(91年第2号、92年第3号、96年第7号を見よ)。

現象学系統のシュペート研究者たちの中では、まずV. I. モルチャーノフに注意しなければならない。彼は70年代末から現象学研究に専念しており、この分野での最大の功労者の一人とみなされている。『ロゴス』誌を再刊したのも彼である。また、彼は96年以降ロシア国立人文大学哲学教授を務め、同学部内の「現象学的哲学センター (Центр феноменологической философии)」の指導にあたっていると聞く。モルチャーノフは92年、『ロゴス』誌に「意識のパラダイムと経験の構造」(1)なる論文を寄せている。冒頭に掲げられた目次によれば、この論文は序章とそれに続く六つの章から成る予定であり、第6章ではシュペートが議論に付されるはずであった。しかし実際には、序章と最初の二つの章しか発表されず、残念ながら以下は未発表のままである。この他にモルチャーノフは、95年刊の『ロシア哲学・小百科事典』で「ロシアにおける現象学」(2)を執筆しており、そこでシュペート(および彼の弟子たち)の現象学的側面について解説している。これはごく簡単な紹介にすぎないが、しかし、シュペートがフッサール(『イデーニ I』)の主観主義を批判することを通じて、定立作用の代わりに「解釈学的作用」を重視するに至る筋道を的確に捉えている。フッサールとシュペートとの関係を問題にする際には、まず参照すべき文献である。

次に名を挙げておきたいのはV. V. カリニチェンコである。彼の論文「グスタフ・シュペート — 現象学から解釈学へ」(3)は92年に『ロゴス』誌に掲載された。カリニチェンコによれば、ロシア哲学史におけるシュペートの功績は、古くからの正教思想の伝統とは異なる新たな伝統を創始した点にある。カリニチェンコの考えでは、その伝統をシュペートは、現象学を批判し、「解釈学的転回」を果たすことによって開始したのである。カリニチェンコのこうした理解は、上のモルチャーノフの見解と一致している。ただし、カリニチェンコはモルチャーノフとは比較にならないほど詳細にシュペート哲学の歩みを跡づけている。モルチャーノフによる紹介文を初級者向けの基本文献とするならば、カリニチェンコの論文は中級者向けの必読文献といったところであろう。一つ難を言えば、カリニチェンコが描くところのシュペートの転回は、発想としてやや凡庸であり、シュペートが実際に成し遂げた転回ほどラディカルではないように感じられる(シュペートの考える解釈学とは、言語に重きを置く認識批判といったものではなく、「すべては言葉である」とする存在論なのではないだろうか)。さらなる好論文が待たれる次第である。

ともかく、モルチャーノフもカリニチェンコも、シュペートの転回を認めているわけである。こうした理解は今や標準的なものとなったと言える。けれども、V. G. クズネーツォフの次の論文も考慮されるべきであろう。それは91年に『ロゴス』に発表された「グスタフ・グスタヴォヴィ

チ・シュペートの哲学的見解における解釈学的現象学」(4)である。クズネーツォフの考えでは、シュペートが狙ったのは現象学と解釈学の融合であり、前者から後者への転回ではないのである。これは気になる論点の提示ではあるが、しかし、クズネーツォフの議論の実際は、シュペート哲学の研究というよりも、むしろ自分の哲学の披瀝に近い。もし仮に「解釈学的現象学」なるものがあるとしても、それはシュペートの説ではなく、クズネーツォフ本人の哲学なのではないかと疑わずにいられない。実際に、上に記した題名は、シュペートの見解の内に著者が見て取ったところの「解釈学的現象学」、という意味に解せなくもない。

さて、ここまで述べてきた三人以外では、特に I. M. チュバーロフに言及しておきたい。彼は 99 年刊の『ロシア哲学・事典』において「シュペート」(5)、『『現象と意味』(6)、「ロシアにおけるフッサール」(7)を執筆している。これらは、上述のモルチャーノフによる紹介文と並んで、現在のところ最も的確な事典記述である。他に、チュバーロフは、自身が編集した『ロシアにおける現象学的哲学のアンソロジー』第 1 巻(98 年)および第 2 巻(2000 年)のそれぞれにおいて、シュペートの著作の抜粋に対する序文を書いている。前者は簡単に「グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペート」と題され(8)、一方、後者には「グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペートの解釈学的弁証法と古典的解釈学および後期フッサールとの関係に関する問題について」という長い題名がつけられている(9)。これら序文は両方とも、分量の制約にもかかわらず、優れたシュペート理解を示す。ところで、興味深いのは、チュバーロフのシュペート評価が第 1 巻と第 2 巻とで大きく変化していることである。第 1 巻でのチュバーロフの見解は、シュペートによるフッサール批判は皮相であり、そのため彼の説は現象学の代案になりえていないというものであった。ところが第 2 巻でチュバーロフは、シュペートの「解釈学的弁証法」が、後期をも含めたフッサール現象学の枠組を大きく踏み越えていること、また、それが既存の解釈学全体の枠内にも収まり切れないこと、これらを主張しているのである。このように、チュバーロフは第 2 巻に至ってようやくシュペートにおける「解釈学的転回」を認めたわけだが(「解釈学的弁証法」はフッサール現象学の枠を超えている)、それはともかく、より重要なのは、チュバーロフがその転回を哲学的に非常に大胆な試みと捉えている点である(「解釈学的弁証法」は解釈学全般という枠組をも超えている)。だが、彼は今のところ、これら以上にまとまったシュペート論を発表していない。今後の活躍が期待される論者である。

以上のように、90 年代のシュペート研究を導いたのは主に現象学研究者たちであった。しかし、近年になって V. P. ジンチェンコ率いる現代ロシア心理学の一派が目立った動きを見せ始めている。彼らの研究成果に 2000 年刊の『グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペート —アーカイヴ資料、回想、論文』(10)がある。ジンチェンコは、ヴィゴツキーらと共にソ連心理学を築いた P. I. ジンチェンコの息子であり、自身もヴィゴツキー学派の継承者として著名である。その彼が 2001 年に『哲学の諸問題』に発表したのが「心理学的活動理論(「未来についての回想」)」(11)である。この論文の中でジンチェンコは、ソ連心理学の歩みを批判的に振り返りつつ、ロシアにおける心理学の未来はヴィゴツキー以前の心理学思想、特にシュペートの思想の内にあると唱えている。彼の呼び掛けに対して、これからロシアの心理学者たちがどのように答えるのか、注視が必要である。

付け加えになるが、91 年、シュペートが晩年を過ごした地トムスクで、シュペート哲学をめ

ぐる「全ソ学会議」が開催された。これに続いて96年には第2回目の会議が、また99年には第3回目、共に同じトムスクで「国際学会議」と改称されて開かれている。三つの会議で行われた報告の要旨は資料集の形で出版された(12、13、14)。今後もこの会議は継続されるものと思われる。

- (1) *Молчанов В.И.* Парадигмы сознания и структуры опыта // Логос. 1992. №3. с.7-36.
- (2) *Молчанов В.И.* Феноменология в России // Русская философия. Малый энциклопедический словарь. М., 1995. с.548-552.
- (3) *Калиниченко В.В.* Г.Шпет : от феноменологии к герменевтике // Логос. 1992. №3. с.37-61.
- (4) *Кузнецов В.Г.* Герменевтическая феноменология в контексте философских воззрений Густава Густавовича Шпета // Логос. 1991. №2. с.199-214.
- (5) *Чубаров И.М.* Шпет Г.Г. // Русская философия. Словарь. М., 1999. с.623-624.
- (6) *Чубаров И.М.* «Явление и смысл» // Русская философия. Словарь. М., 1999. с.623-624.
- (7) *Чубаров И.М.* Гуссерль в России // Русская философия. Словарь. М., 1999. с.127-128.
- (8) *Чубаров И.М.* Густав Густавович Шпет // Антология феноменологической философии в России. М., 1998. с.315-320.
- (9) *Чубаров И.М.* К вопросу об отношении герменевтической диалектики Густава Густавовича Шпета к классической герменевтике и проблематике позднего Гуссерля // Антология феноменологической философии в России. #2. М., 2000. с.37-47.
- (10) Густав Густавович Шпет. Архивные материалы. Воспоминания. Статья. М., 2000.
- (11) *Зинченко В.П.* Психологическая теория деятельности. («Воспоминания о будущем») // Вопросы философии. 2001. №2. с.66-88.
- (12) Шпетовские чтения в Томске, 1991. Всесоюзная научная конференция «Творческое наследие Г.Г.Шпета и современные гуманитарные исследования» 9-11. апреля 1991: Материалы конференции. Томск, 1991.
- (13) Г.Г.Шпет / Comprehensio. Вторые шпетовские чтения. Творческое наследие Г.Г.Шпета и современные философские проблемы. Материалы международной научной конференции 14-17 ноября 1996. Томск, 1997.
- (14) Г.Г.Шпет / Comprehensio. Третьи шпетовские чтения. Творческое наследие Г.Г.Шпета и философия 20 века. К 120-летию со дня рождения Г.Г.Шпета. Материалы международной научной конференции 7-9 апреля 1999. Томск, 1999.

<国外>

翻訳出版

90年代以降の国外の研究の中では、何よりもまずシュペートの著作の翻訳出版について述べておきたい。著作の全訳としては、今のところ次の二つがある。一つは『現象と意味 —根本学としての現象学とその諸問題』(1914年)の英訳(1)であり、これは91年にアメリカで出版され

た。この翻訳書には訳者 T. ネメスのまえがき、および上述のハールトによる解説が付けられている。もう一つは、遺稿「解釈学とその諸問題」(1918年執筆)のドイツ語訳(2)であり、93年の公刊である。こちらには上述のローディのまえがき、および編者ハールトの解説に加えて、もう一人の編者 R. ダウベ=シャッカートとローディ共著のあとがきが付されている。

これらの他、『哲学に関するロシア研究』なる英語誌において、シュペートの著作およびシュペートに関する研究論文のいくつかが訳出されている。同誌は、ロシア語哲学(現代ロシアの主要哲学雑誌『哲学の諸問題(Вопросы философии)』や『哲学研究(Философские науки)』などに発表された論文)を英訳公刊することを専らの目的とするものとされているが、これに97年に掲載されたのが、シュペートの草稿「哲学論考」(3)、および、前述の V.G. クズネツォフの手になるこの草稿への序文の訳(4)である。さらに同誌は99年、「グスタフ・シュペート：生涯と思想(Gustav Shpet: Life and Thought)」と題する特集を組み、以下の四つの著作、M.K. ポリヴァーノフ著「G.G. シュペートの履歴の概観」(5)、L.A. コーガン著「読まれざるページ —G.G. シュペート、科学的哲学研究所所長(1921年—1923年)」(6)、シュペートの遺稿「解釈学とその諸問題」の中のディルタイに関する部分(7)、クズネツォフの論文「グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペートの肯定哲学の基礎づけにおける解釈学的哲学の役割」(8)の翻訳を公にしている(前の三つは既に言及されたものであり、また、最後のクズネツォフの論文も、既述の「グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペートの哲学的見解における解釈学的現象学」の拡大版である)。

付言しておく、前に触れたフライベルガーが、『現象と意味』の英訳、「解釈学とその諸問題」の英訳および独訳を試みたらしい。しかし、公刊には至らなかったようである。また、いくつかの著作のイタリア語への翻訳計画もあったと聞く。だが、これも実現しなかったらしい⁹。

- (1) Shpet G. *Appearance and Sense: Phenomenology as the Fundamental Science and its Problems*, translated by T. Nemeth. Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers, 1991.
- (2) Spet G.G. *Die Hermeneutik und ihre Probleme (Moskau 1918)*, hrsg. von A. Haardt und R. Daube-Schackat, übers. von E. Freiberger und A. Haardt. Freiburg; München: Karl Alber, 1993.
- (3) Shpet G.G. "A Work on Philosophy", *Russian Studies in Philosophy*. Spring 1997 / Vol.35, No.4. pp.43-59.
- (4) Kuznetsov V.G. "Introduction to the Publication of G.G.Shpet's "A Work on Philosophy"", *Russian Studies in Philosophy*. Spring 1997 / Vol.35, No.4. pp.39-42.
- (5) Polivanov M.K. "An Outline of G.G.Shpet's Biography", *Russian Studies in Philosophy*. Spring 1999 / Vol.37, No.4. pp.6-38.
- (6) Kogan L.A. "An Unread Page. G.G.Shpet as Director of the Institute of Scientific Philosophy, 1921-23", *Russian Studies in Philosophy*. Spring 1999 / Vol.37, No.4. pp.38-52.
- (7) Shpet G.G. "On Wilhelm Dilthey's Concept of the Human Sciences. Excerpts from *Hermeneutics and Its Problems*", *Russian Studies in Philosophy*. Spring 1999 / Vol.37, No.4. pp.53-61.
- (8) Kuznetsov V.G. "The Role of Hermeneutic Phenomenology in Grounding the Affirmative Philosophy of Gustav Gustavovich Shpet", *Russian Studies in Philosophy*. Spring 1999 / Vol.37, No.4. pp.62-90.

フッサール—シュペート往復書簡

現在のところ最も完全で信頼に足るフッサール著作集である『フッセリアーナ』の中の一冊として、『フッセリアーナ・資料文献』第3巻「往復書簡」の第3分冊「ゲッチンゲン学派」が1994年に公刊された。これはその題名が示すとおり、ゲッチンゲン大学時代（1901年—16年）のフッサールと、その頃に彼と学問上の交流を持った者たちとの間で交された書簡を集めたものである。この資料集の中に、伝記の中で触れたフッサールとシュペートとの往復書簡（1）も収録された。書簡は全13通で、うち8通はフッサールからシュペートへの手紙であり（ただし、それらのうちの2通はフッサールの妻が発信）、残り5通がシュペートからフッサールへの書簡である。日付に関しては、1913年から14年までに発信されたのが11通で大半を占め、その他の2通は18年に交されている。伝記で言及されたのは、それらのうち、13年11月から14年5月までの間にやりとりされた7通（第4から第10書簡まで）である。これら往復書簡は、シュペートによる現象学受容の問題を研究する際、貴重な資料となるものである。

- (1) "Gustav von Spett", *Husserliana Dokumente*. Bd. III: *Briefwechsel*. Teil 3: *Die Göttinger Schule*, hrsg. von K. Schuhmann. Dordrecht: Boston: London: Kluwer Academic Publishers, 1994. S.525-544.

学説研究

80年代に続き、90年代以降も、国外におけるシュペート哲学の研究は、着実に成果を蓄積しつつある。そうした諸成果の中でひととき目を引くのが、すでに再三言及したハールトが92年に発表した著書『ロシアのフッサール —グスタフ・シュペートとアレクセイ・ローセフにおける言語と芸術の現象学』（1）である。本書は次のような三つの部分から構成されている。第一部は「1914年から1930年までのロシアとソ連における現象学受容の前提条件と特徴」という題名を持ち、これは大きな序論とみなしうる部分である。続く第2部と第3部は、それぞれ「グスタフ・シュペートの解釈学的理性の現象学」、「アレクセイ・ローセフの弁証法的現象学」と題されており、これらがこの研究の本論である。だが第2部のシュペート論は、第3部のローセフ論と比べると二倍以上の分量を有しており、このことからして本書の中心が第2部であることは明白である。さて、この第2部では、シュペートの生涯の略述や思索過程の時期区分に続いて、1910年代から20年代にかけてのシュペートの思索のほぼ全体が議論の対象となっている。このように包括的なシュペート研究は、今のところ本書を除いては他にない。ただこの一点のみからしても、本書は現時点における最も重要な研究であると言える。さらにハールトは、この画期的な仕事に加えて、98年刊の『ラウトリッジ哲学百科事典』において「シュペート」の項目（2）を執筆している。これは4ページに及ぶ記述であり、事典類での解説としては最も充実したものである。西欧の主要な哲学事典の一つにシュペートを登録したハールトの功績は、非常に大きいと思われる。

ハールトの研究以外には、次のようないくつかの論文が見受けられる。93年発表の J.P. スキャンラン著「ロシアにおける現象学 —グスタフ・シュペートの貢献」（上記『現象と意味』英訳への書評）（3）、96年の G.L. クライン著「ロシア新フッサール主義者の瞑想 —グスタフ・シュペートの論文『懐疑主義者とその心』」（4）、96年の Ch. メッケル著「言語表現による理解の問題 —グスタフ・シュペートによるエドムント・フッサール第1論理学研究の受容

について」(5)、97年のS.カッセディ著「グスタフ・シュペートと現象学、正教を基調として」(6)など。

最後に、日本の状況について述べておく。94年刊の『現象学事典』および98年刊の『岩波哲学・思想事典』には「シュペート」の項(7、8)が設けられている(ただし、後者では「シペート」という表記)。だが、いずれもわずかな記述である。現象学やロシア・フォルマリズム関連の邦語文献の中で、時折シュペートの名が見受けられる。しかし、シュペート哲学を正面から取り扱った研究は今のところ皆無である。

- (1) Haardt A. *Husserl in Rußland. Phänomenologie der Sprache und Kunst bei Gustav Spet und Aleksej Losev*. München: Wilhelm Fink Verlag, 1992.
- (2) Haardt A. "Shpet, Gustav Gustavovich", *Routledge Encyclopedia of Philosophy*. Vol.8. London ; New York, 1998. pp.754-758.
- (3) Scanlan J.P. "Phenomenology in Russia: the Contribution of Gustav Shpet", *Man and World*. 26. 1993. pp.467-475.
- (4) Kline G.L. "Meditation of a Russian Neo-Husserlian: Gustav Shpet's The Skeptic and his Soul", *Phenomenology and Skepticism*. Evanston: Northwestern University Press. 1996. pp.144-163.
- (5) Möchel Ch. "Das Problem des Verstehens von sprachlichen Ausdrücken: zur Rezeption von Edmund Husserls I. *Logischen Untersuchung* durch Gustav Spet", *Recherches husseriennes*. 3(5). 1996. S.53-81.
- (6) Cassedy S. "Gustav Shpet and Phenomenology in an Orthodox Key", *Studies in East-European Thought*. 49. 1997. pp.81-108.
- (7) 磯谷孝「シュペート」『現象学事典』弘文堂、1994年、526ページ。
- (8) 長縄光男「シペート」『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、1998年、679ページ。

¹ Шпет Г.Г. Философия Джоберти. По поводу книги В.Эрна «Философия Джоберти» // Мысль и слово. Философский ежегодник. Т.1. М., 1917. с.297-367. (G.G.シュペート「ジョベルティの哲学 —V.エルン『ジョベルティの哲学』について」『思想と言葉 —哲学年刊』第1巻、モスクワ、1917年、297-367ページ。)

² その他、プロコフィエフなる人物によって『ロシア哲学の発展の概観』第1巻への評が1924年に書かれている。

Прокофьев П. Густав Шпет. Очерки развития русской философии. Ч.1 // Современные записки. 1924. №18. с.454-457.

この「プロコフィエフ」は、D.I.チジェフスキー(Д.И.Чижевский)の偽名であると聞く。だが、これが事実であるか、筆者は未だ確認していない。

³ 例外として、1932年刊の百科事典『グラナート』第7巻の「シュペート」の項目がある。

Шпет // Энциклопедический словарь «Гранат». 7-е изд. Т.50. М.—Л., 1932.

この項の執筆者の名はふせられているが、実のところ、これはシュペート自身によって執筆されたものである。ただし、それは編集者によって一部改変された文章である。この件に関しては、以下を参照。

Митюшин А.А. О том, как «делается» история русской философии. (Комментарий к статье

«Шпет») // Начала. 1992. №1. с.52-54.

編集者によって手を加えられていないオリジナル原稿が公にされている。なお、この無修正原稿は付録として本論文の末尾に訳出されている。

Шпет Г.Г. Шпет. (Статья для энциклопедического словаря «Гранат») // Начала. 1992. №1. с.50-52.

4 Шпет Г.Г. Сознание и его собственник. (Заметки) // Шпет Г.Г. Философские этюды. М., 1994.

с.20-116. (G. G. シュペート『意識とその所有者 (覚書)』、再版著作集『哲学習作』、モスクワ、1994年、20-116ページに収録。)

Шпет Г.Г., Бачинский А.О. Некоторые черты из представления Н.О.Лосского о природе. По поводу книги : Н.О.Лосский. Материя в системе органического мировоззрения. М. 1916 // Мысль и слово. Философский ежегодник. Т.1. М., 1917. с.368-374. (G. G. シュペート, А.О. Бачинский「N. O. ロスキーの自然理解のいくつかの特徴 —N. O. ロスキー『有機的世界観の体系における物質』、モスクワ、1916年について」『思想と言葉 —哲学年刊』第1巻、モスクワ、1917年、368-374ページ。)

5 Шпет Г.Г. Критические заметки к проблеме психической причинности. По поводу книги В.В.Зеньковского «Проблема психической причинности», Киев, 1914 // Вопросы философии и психологии. 1915. Кн.127(2). с.283-313. (G. G. シュペート「心的因果性の問題に関する批判的覚書 —V. V. Зенковский『心的因果性の問題』、キエフ、1914年について」『哲学と心理学の諸問題』1915年2号(第127巻)、283-313ページ。)

6 ローディは1970年よりルール大学の哲学教授であり、さらに同大学のディルタイ研究所所長でもある。彼の論文の邦訳に、『思想』1984年2号(特集「ディルタイ・ルネサンス」)に収録の大野篤一郎訳「ディルタイ、ガダマーと『伝統的』解釈学」がある。

また、彼の師、ボルノウの著作の邦訳に、麻生健訳『ディルタイ —その哲学への案内』筑摩書房、1977年、高橋義人訳「ディルタイと現象学」(上記の『思想』誌の特集に収録)、高橋義人訳『ディルタイとフッサール —20世紀哲学の源流』岩波書店、1986年など。

7 このシンポジウムは86年の6月12日から14日までドイツのBad Homburgで開催された。

8 本稿の執筆の最中、2004年に、注目すべき伝記研究、T. G. シCHEDリナ著『私は書く、他者のこだまとして… —グスタフ・シュペートの知的バイオグラフィーの概観』が発表された。

Шедрина Т.Г. "Я пишу как эхо другого..." Очерки интеллектуальной биографии Г. Шпета. М., 2004.

本書の特徴は、アーカイヴに保管されているシュペートの書簡やノートといった文書を丁寧に調べることを通じて、公にされた著作にははっきりと現れていない、彼の私的な思索の内容を浮き上がらせようと試みている点にある。したがって、シCHEDリナが狙うのはシュペートの生涯にまつわる諸々の事実をつきとめることではない。とはいえ、いくつかの伝記的事実に関して言うならば、彼女はそれらを新たに明らかにしている(例えばシュペートの国外研修に関する事実)。ともかく、本書がシュペートの伝記研究にとって重要な一歩であることは間違いないのだが、しかしながら、本稿の筆者は现阶段においてそれを十分に消化できていない。それゆえ、遺憾ながら筆者はここではシCHEDリナの著書に関するこれ以上の批評を断念し、他日の紹介を期することにした。

9 本稿の執筆の最中、2004年6月に、シュペートの最も重要な著作の一つ『美学断章』第1部—第3部(1922年—1923年)の邦訳が出版された。

グスタフ・シペート著、加藤敏訳『美学断章』水声社、2004年。

筆者の知る限りでは、シュペートのこの著作が外国語に翻訳されたのは初めてである。訳に関して言えば、一見して、これは労作であるとの印象を持った。ただし、筆者は未だ訳文を丁寧に検討する機会を持たずにおり、そのため、本訳書に対するこれ以上の評言は差し控える。

本訳書の出版が、日本におけるシュペート研究進展のきっかけとなることを願う。

3. 時期区分と思想の全体像

3-1. 時期区分の試み

先行研究の概観の中で述べたように、包括的なシュペート研究としては、ハールトの著作『ロシアのフッサール ―グスタフ・シュペートとアレクセイ・ローセフにおける言語と芸術の現象学』がある。同書においてハールトは、ここでの目的にとって好都合なことに、「シュペートの哲学的思索過程による時期区分」を試みている¹。これを除いては同種の試みを知らないため、我々はともかくこのハールトの区分を参照せねばなるまい。しかし、実を言えば、ハールトによる区分は諸々の点で十分に適切であるとは言い難い。そこで我々は、シュペートの生涯の略年譜を参照しながら、まずはハールトの区分案がどのようなものであるかを確認し、それに続いて彼の案の難点を指摘しようと思う。そして最後に、ハールトへの批判をふまえて、より適当であると思われる我々の時期区分を提示することにしたい。

【シュペートの生涯の略年譜】

- 1879年4月7日(旧暦3月26日)、キエフ近郊に生まれる。私生児。キエフのギムナジウムで学ぶ。
- 1898年、聖ヴラジーミル大学(後のキエフ大学)の物理・数学部に入学。マルクス主義に傾倒し、1900年、第2学年を終えた時点で放校。さらには逮捕され、キエフから追放される。
- 1901年、同大学に復帰。ただし歴史・文学部の哲学科に入り直す。G. I. チェルパーノフの「心理学ゼミナール」に参加。
- 1905年、同大学卒業。教授資格取得準備のため同大学に残ることを許される。
- 1906年、キエフの私立ギムナジウムおよび高等女子学校で教鞭をとる。
- 1907年、前年モスクワ大学へ移っていたチェルパーノフ、シュペートを同大学に呼び寄せる。モスクワの高等女子学校で教壇に立つ。
- 1909年、シャニャフスキー人民大学で教える。
- 1910年、学位試験に合格。モスクワ大学の私講師となる。
- 1910年夏、短期国外研修を行う。行き先はベルリン。また同時に、チェルパーノフと共に、ライプツィヒ大学のW. ヴント、ベルリン大学のC. シェトゥンプらの心理学実験室を視察する。
- 1911年夏、再びベルリンで研修を行う。
- 1912年春、ゲッチンゲン大学で研修。夏に一時帰国した後、秋から同大学での研修を再開。この秋にE. フッサールの知遇を得、彼のゼミナールや講義に出席。同大学での研修は翌13年の夏まで続けられる。
- 1913年夏、エジンブルグおよびロンドンで資料収集を行う。8月末にゲッチンゲンへ戻り、しばらく研修を継続し、10月初めに帰国。
- 1914年7月、ゲッチンゲン訪問。フッサールと親密に話し合う機会を得る。
- 1916年、学位論文公開審査に合格。モスクワの高等女子学校教授およびモスクワ大学助教授に就任。
- 1917年、哲学年刊誌『思想と言葉』を編集出版。
- 1918年、モスクワ大学教授に就任。

- 1919年から20年まで、モスクワ言語学サークルに参加し、支持者を得る。
- 1920年、モスクワ大学内に民族学研究室を設け、ここに教え子たちを集める。
- 1921年、革命政府によりモスクワ大学での教職から追放される。しかし、同年、科学的哲学研究所初代所長に就任、23年までこれを務める。また、同年、ロシア芸術アカデミー（後の国立芸術学アカデミー）のメンバーに選出される。
- 1922年、他の多くの知識人たちとともに国外追放者リストに挙げられるが、A.V.ルナチャルスキーに働きかけ、リストから自分の名を削除することに成功。また同年、上記アカデミー内に哲学部門を設け、以後そこでの研究を指導。
- 1924年、同アカデミーの副総裁に就任。
- 1929年、政府により同アカデミー解体。事実上、哲学に関わる活動を禁じられる。
- 1930年、哲学研究を正式に禁じられ、以後文学作品の翻訳に従事。
- 1935年、逮捕。エニセイスクへ流刑。
- 1936年、トムスクの流刑地へ移る。
- 1937年10月27日、再逮捕。11月16日、銃殺。

以上のようなシュペートの生涯のうちに、ハールトはまず、彼が哲学に専従した時期を区別する。ハールトによれば、それは1898年から1931年までの時期である。1898年とはシュペートが大学に入学した年であり、1931年とは彼が哲学に関する最後の公刊物（百科事典『グラナート』の「シュペート」の項目）を執筆した年である。続いてハールトはこの30年あまりの期間を次のように区分する。

- 第1期（1898年—1905年）：キエフ大学で学んだ時期。この期間に「マルクスからカントへ」という当時のロシア知識人に典型的な思想上の転換を遂げる。
- 第2期（1906年—1912年）：大学卒業後キエフからモスクワへと移り、研究を継続した時期。この頃、カントおよび新カント派の哲学に対して批判的になる。これと平行して、プラトン哲学へと回帰する傾向を持つ、19世紀末から20世紀初めの「モスクワ形而上学派」（V.S. ソロヴィヨフ、L.M. ロパーチン、S.N. トルベツコイら）へと接近する。
- 第3期（1913年—1931年）：モスクワ形而上学派のプラトニズムの文脈でフッサール現象学を受容し、それを「解釈学的理性の現象学」へと発展させる時期。ハールトはこれをさらに三つに区分する。
- A) 1912年の秋から1913年の夏にかけてゲッティンゲン大学でフッサールの講義を聞き、帰国後1914年に『現象と意味』を発表するまでの時期。
 - B) 1915年から1919年まで、すなわち、ディルタイの「生の哲学」を受容し、現象学を解釈学の方角へと導く時期。
 - C) 1921年から1931年まで、すなわち、文化の哲学、言語と芸術の哲学を具体化する時期。

このようなハールトの時期区分は、我々の見るところでは、いくつかの点で不適切である。以下で我々はハールト案の欠陥のうち主だったものを挙げ、それらを修正してみたいと思う。（ちな

みに、ハールトの時期区分ばかりでなく、彼による各時期の特徴づけにもいくつか見当違いな点が見受けられる。これらに関しては、少し後で述べる。)

①ハールトによれば、シュペートが哲学に携わったのは1898年から1931年までの期間である。だが第一に、略年譜を見れば明らかなように、シュペートが哲学研究を開始したのは、1898年の大学入学時ではなく、1901年の大学復学時である。また第二に、ハールトはシュペートが最後の公のテキスト（百科事典『グラナート』の「シュペート」）を執筆したのは1931年であるとしているが、これは正しくは1929年である²。しかもこの29年というのは、国立芸術学アカデミーが閉鎖され、事実上シュペートが哲学を禁じられた年でもある。これらのことからして、彼が哲学研究を行った期間は1901年から1929年までの間と考えるべきである。

②ハールトはシュペートの大学時代と大学卒業後の時代とを分けているが（第1期と第2期）、この区分にそれほど大きな意味があるとは思えない。なるほど、大学卒業後しばらくしてキエフからモスクワへと移ったことは、シュペートにとって大きな出来事ではあっただろう。しかし、そうした環境の変化はあったにせよ、彼は社会的な身分からすれば、学位と教授資格の取得準備に励む一介の学生のままであったし、また、思想的な成熟の度合からしても、まだまだ自立にはほど遠かったのである。このことを思えば、シュペートの大学時代と大学卒業後の時代は、ハールトが考えるような二つの別々の時期ではなく、むしろ一つのまとまった時期、一続きの修学時代と捉えるべきである。

③ハールトは第3期を1912年の秋ないし1913年から1931年までとしているが、これは年数にして20年近い。確かにハールトはこの期間をさらに三つに下位区分してはいるが、それでもやはり、それを一まとまりの大きな時期とみなしていることに変わりはない。彼の言う第3期が、長さの点で他の時期と釣り合わないことはあまりに明らかである。それにもかかわらず、あえてハールトがこのような奇妙な区分を試みるのは、彼にとってシュペートとは、あくまでも「ロシアのフッサール」であるからだろう。彼の観点からすれば、シュペートの思索過程における最重要の転機はフッサール現象学の受容なのだろう。しかし、我々はハールトのこうした見解を受け入れることはできない。シュペートに対する現象学の影響が他にもまして甚大であったこと、これは我々も認める。だが、シュペートはフッサールのエピゴーネンに止まったわけではなく、やがて自分自身の説を築き上げ、独立独歩の哲学者へと成長したのである。この点に注目すれば、フッサール以後を一まとまりと見るような大雑把な区分を認めるわけにはいかない。我々はハールトの第3期におおよそ該当する時期を二つの別個の期間に区別することを提案する。一つは、シュペートがフッサール現象学と出会い、これと格闘しながら、自身の哲学の構想を練り上げる時期であり、これは言わば自立への過渡期である。もう一つは、彼が革命後の混乱の中で、それでも以前の構想を見失わず、それに基づいて自説を展開してみせる時期であり、ここにおいて彼の哲学上の自立が果たされる。

ここまで述べたことをふまえ、我々はシュペートの思索過程を次のように時期区分する。

- 1) 修学期 (1901年—1910年) : 1901年にキエフ大学に復学してから、7年にモスクワに移り、10年に学位試験に合格するまでの時期。
- 2) 構想期 (1910年—1916年) : 1910年と11年の短期国外研修に始まり、12年から13年にか

けてのゲッチンゲン大学留学を経て、16年に学位論文審査に合格するまでの時期。

- 3) 展開期 (1917年—1929年) : 1917年の革命以降、18年にモスクワ大学教授に就任し、混乱の中で研究を続け、その後22年、国立芸術学アカデミー内に哲学部門を創設し、そこで独創的な研究をさらに押し進めるが、ついに29年、この最後の活動拠点さえ奪われるまでの時期。

3-2. 各時期の思想の特徴

上に記した三つの時期のそれぞれを、我々は以下で簡単に特徴づけることにする。それはまた同時に、シュペートの思想の全体像を暫定的に提示することでもある³。

1) 修学期 (1901年—1910年)

この時期シュペートは書評等を除いてまだほとんど何も発表していない。例外として、1905年の「実験心理学における記憶」に関する論文、そして卒業論文を活字化した1907年の著書『ヒュームとカントにおける因果性の問題 —カントはヒュームの疑念に答えたのか』があるのみである。この頃彼が行っていたのは、主に将来の哲学研究に向けて基礎的能力を培うことであり、シュペート哲学と呼びうるものは体を成さなかった。したがって、基本的には、この時期の彼の思想を云々することはできない。この時期は伝記研究の対象となりうるのみであろう。

だが、参考までに、ヒュームとカントに関する上記の著書の結論を紹介しておこう。シュペートによると、ヒュームが疑ったのは、因果関係の論理的な必然性を証明することは可能かという点であった。ヒュームはそうした証明は不可能であるとした。これに対抗してカントはその証明を試み、本人はこれを成し遂げたと考えた。しかし、シュペートに言わせれば、カントが成したのは、因果関係の論理的な必然性の証明ではなく、因果関係の実践的な必然性の基礎づけである。すなわち、シュペートによれば、カントが示したのは、因果関係の論理的な必然性の証明は不可能なのではなく、不必要であるということであり、もし我々が認識することを欲するのであれば、我々は因果関係を是が非でも信じなければならぬということである。こうして、シュペートは「カントはヒュームの疑念に答えたのか」という問いにこう答える。「カントはヒュームの疑念を除去しなかった。しかし、実のところ、何も除去する必要がなかったのである。というのも、何も証明する必要がなかったからである」。ここでシュペートが言わんとするのは、カントはヒュームの疑念を疑念として受け止めることすらしなかった、したがってまた、ヒュームの疑念はそのまま残されてしまった、ということだと思われる⁴。

ところで、ここでハルトに対して一言だけ言っておきたい。彼によれば、シュペートは1901年にキエフ大学に復学するとともに「マルクスからカントへ」転回し、1905年に同大学を卒業した後でカントに批判的になったのであった。しかし、我々の知るかぎり、シュペートがカント主義者であったという事実はない。確かに、キエフ大学でシュペートが師事したチェルパーノフは、心理学主義者としてカントの認識批判にも精通していたが、しかし、特にカントを崇拝していた

というわけではない。当時の西欧やロシアの大多数の哲学者たちと同様、チェルパーノフもまた、ドイツで唱えられた「カントへ帰れ」という呼び掛けに無関心でいられたただけであると思われる⁵。シュペートについても同じことが言えるだろう。彼も哲学を始めるに当たって、カントないし新カント主義の研究を重視したことは確かであるが、このことのみをもって彼がカントへと転回したとするのは強引すぎる。シュペートはまず、カント主義者ではなく、むしろヒュームの懐疑主義者として知られたのである⁶。

【主要著作】

『ヒュームとカントにおける因果性の問題 —カントはヒュームの疑念に答えたのか』(1907年)

2) 構想期 (1910年—1916年)

自身にとっての哲学的問題が何であるか、これをシュペートはヒュームの認識論上の懐疑との接触によって明確化した。ヒュームは、伝統的形而上学の独断論（何らかの実体の独断的肯定）への疑念ゆえに、懐疑論（実体全般の独断的否定）を打ち出した。けれども、この立場は早晩、克服し難い困難に陥る。というのも、懐疑論による否定とは、疑わしいものの否定であり、この種の否定は、(いわば「疑わしきを罰す」という) その独断性ゆえに、いづれ度を越してすべての否定へと行き着かざるをえないからである。この全否定を逃れようと思うならば、懐疑論はどこかで何かを肯定しなければならぬわけだが、しかし、他を差し置いて、或る特定の何かのみを肯定することに正当な理由はありえない以上、その何かの肯定は独断的であるよりほかはない。こうして懐疑論は、全否定か、それから逃れるために独断論へ転じるか、というジレンマに陥る。因果性に関する論文で、カントによって解決されていないとシュペートが主張したのも、このような板ばさみの状況であった。シュペートによれば、カントはヒュームの懐疑（因果性の否定すなわち全否定）を避け、独断論（「悟性」ないし「理性」の肯定）へ転じたにすぎないのである。

シュペートはジレンマを解消すべく歩み始める。彼はまず、ディルタイ、ジェームズ、ベルクソンらの「生の哲学」に注目している（その他、ブレンターノ学派にも高い関心を示している）。彼はこれらのうちにジレンマ解消への大きなヒント、すなわち、すべての肯定という発想を見出す。また、興味深いことにシュペートは、P. D. ユルケーヴィチ（Памфил Данилович Юркевич 1827-1874）、V. S. ソロヴィヨフ（Владимир Сергеевич Соловьев 1853-1900）、L. M. ロパーチン（Лев Михайлович Лопатин 1855-1920）、S. N. トルベツコイ（Сергей Николаевич Трубетцкой 1862-1905）など、19世紀後半および20世紀初めのロシアの哲学者たちのうちに同様の発想を認め、それをロシアにおける哲学的思索の特質とまで言っている。

続いてシュペートは、ブレンターノ学派の一員であるフッサールに師事する。しかし、彼はフッサール（『イデーニ I』）にただ追随したわけではなく、フッサールが主客対立図式から脱却しておらず、それゆえに、すべてを肯定し切れていない点を批判している。シュペートは現象学を全肯定の方向へとずらし、その結果、すべてを言葉とみなすようになる。こうして彼が提出したのが、言語と文化の哲学の構想である。

再度、ハールトに一言。彼の解釈によれば、シュペートはモスクワ形而上学派のプラトニズムというコンテキストにおいてフッサール現象学を受容したのであった。だが我々が思うに、シュペートはフッサール現象学をロシア哲学の文脈に引きずり込もうとしているのではなく、それとは逆に、ロシア哲学をフッサール現象学をも含む同時代の西欧哲学の文脈に参入させようとしているのである。シュペートの指向は輸入的というより、むしろ輸出的である。

【主要著作】

「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911年)

「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912年)

『現象と意味 一根本学としての現象学とその諸問題』(1914年)

『論理学の問題としての歴史 一批判的および方法論的研究』第1巻：資料(1916年)

3) 展開期 (1917年—1929年)

シュペートは自身の記号存在論を「論理学」と称する(logicは「ロゴスに関する学」という意味に解しうるから)。彼によれば、ロゴスの本質はその歴史性にあり、それゆえ、歴史こそが論理学にとっての最大の問題である。歴史を見据える論理学を、彼は特に「解釈学」のうちに見ている。シュペートは自身の論理学ないし解釈学を、大別して次の二つの方向に展開する。すなわち、学問(哲学)の歴史の研究と、芸術の歴史の研究との二方向である。

また、これらと並行的ないし一体的に、人間研究の方法論の確立をシュペートは試みる。彼は人間科学を「民族心理学」ないし「社会心理学」として整備しようとした。彼の考えでは、人間という存在者も一つの記号である。

彼のロシア哲学史研究は独立した一個の著作群をなす。もともと、この一連の著作を上論理学または心理学の一部とみなすことも可能である。

再々度、ハールトに一言。彼によれば、シュペートは『イデーニ I』を批判的に受容した後、今度はディルタイの思想を摂取するのであった。しかし、実際には、シュペートはディルタイと同程度かあるいはそれ以上に、フッサールの『論理学研究』、マルティエーの言語哲学、マイノングの「対象論」など、ブレンターノ学派の諸説に影響されている(シュペートがフンボルトに向かったのはマルティエーの議論に促されたからだと考えられる)。シュペートは、思想の大枠に関しては、ディルタイらの「生の哲学」(また、ユルケーヴィチらロシア人哲学者たちの「生の哲学」)を支持している。しかし、思想の内実(個々の細かな議論)に関しては、彼はブレンターノ学派からより多くを学んでいるように見える。この点は強調されてしかるべきだと思われる。

【主要著作】

『意識とその所有者』(1916年)

「智慧か理性か」(1917年)

「民族心理学の対象と課題」(1917年-1918年)

- 「解釈学とその諸問題」(1918年執筆)
 「懐疑主義者とその心 一哲学的解釈に関する練習曲」(1918-1921年)
 「論理学の対象としての歴史」(1922年)
 『美学断章』第1部-第3部(1922年-1923年)
 「芸術としての演劇」(1922年)
 「現代美学の諸問題」(1923年)
 『民族心理学序説』第1部(1927年)(上掲の「民族心理学の対象と課題」の増補改訂版)
 『言葉の内部形式 一フンボルトを主題とする練習曲と変奏曲』(1927年)
- 「P. D. ユルケーヴィチの哲学的遺産 一没後40周年記念に寄せて」(1914年)
 『ゲルツェンの哲学的世界観』(1921年)
 「哲学史の観点から見たラブロフの人間主義」(1922年)
 『ロシア哲学の発展の概観』第1巻(1922年)

「序」で予告したとおり、我々は以降の第2部において、我々の区分の構想期に属する三つの著作、すなわち「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911年)、「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912年)、『現象と意味』(1914年)を順に詳しく検討していくことにする。しかし、構想期のもう一つの著作である『論理学の問題としての歴史』第1巻(1916年)、および、展開期に配された『意識とその所有者』(1916年)については、ここで付言しておく必要があるだろう。まず『論理学の問題としての歴史』第1巻に関して言うと、「伝記」で述べたように、これはシュペートの学位論文であり、18世紀西欧哲学史に関する彼の博識がふんだんに投入された著作である。だが、これは我々の目的にとってあまりに浩瀚、煩雑にすぎるし、また、これにはシュペートの生前には公刊されず、最近になって公にされた続巻(草稿)があり、本来、両者は併せて論じられるべきであると思われる。こうした理由で、我々は第2部での考察の対象から『論理学の問題としての歴史』第1巻を除くことにする。次に『意識とその所有者』について言うと、これは発表年からすれば、構想期に配置されるべき著作である。しかしながら、これは内容の面からすると、展開期の「民族心理学の対象と課題」(1917年-1918年)や『美学断章』第1部-第3部(1922年-1923年)などと密接に結びついており、その点で展開期に属するとされなければならない著作である。そのため、我々は『意識とその所有者』をも以降で検討しないことにする。

既存のシュペート研究においては、「ヒュームの懐疑論と独断論」や「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」は十分に論じられることがなかった。それら先行研究においては、まず最初『現象と意味』でシュペートがどのようにフッサール現象学を受容・批判したかが問題にされ、続いて彼独自の言語哲学、解釈学、記号学などが議論の俎上に上げられることが多い。これに対し、我々は『現象と意味』以前から始める。このことによって、シュペートがいかにして現象学に向かうことになったのか、そして、現象学にすら満足せず、どのようにして自身の言語と文化の哲学を構想することになったのか、その理路を明らかにできるであろう。我々の狙いは、言葉という問題へとシュペートの思考が至る筋道を追体験することにある。

ロシアを含む非西欧の思想にあつては、近代西欧哲学との出会いの際、これと向き合うことを避けようとするのがしばしばである。その点シュペートは、以下で検討される構想期の著作において、近代西欧の哲学とよく対峙している。彼による近代西欧哲学の研究は、執拗と言ってもよいほどに念入りであるが、こうした濃密な対話の例は、ロシアのみならず他の非西欧の思想史においてもそれほど多くは見られないであろう。それゆえ、以下の検討から得られる成果は、日本など非ヨーロッパ地域における哲学の近代化や、さらには哲学の世界化といった問題を考える上で、多くの示唆を与えるものとなるであろう。

¹ Haardt A. *Husserl in Rußland. Phänomenologie der Sprache und Kunst bei Gustav Spet und Aleksej Losev*. München: Wilhelm Fink Verlag, 1992. S.72-73.

² Шпет Г.Г. Шпет. (Статья для энциклопедического словаря «Гранат») // Начала. 1992. №1. с.50-52.
シュペートが自身の哲学を解説したこの小品の末尾に「1929年6月19日執筆」とある(本稿の付録を参照)。これはシュペートのオリジナル原稿を公刊したものである。一方、実際に百科事典『グラナート』に掲載されている「シュペート」の項目は、オリジナル原稿に編集者が手を加えた修正版であり、執筆の日付なしで1932年に発表されている。我々が今問題にしているハールトの著作は1992年刊である。執筆時、ハールトはオリジナル原稿を知らなかったに違いない。

³ なお、この作業を行うにあたって、我々は本稿の末尾に付録として訳出した二つの文章を大いに活用した。それらも参照してもらいたい。

⁴ Шпет Г.Г. Проблема причинности у Юма и Канта. Ответил ли Кант на сомнения Юма? Киев, 1907. с.201-203.

⁵ カントとチェルパーノフとの関係については、次を参照。

Абрамов А.И. О русском кантианстве и неокантианстве в журнале «Логос» // Кант и философия в России. М., 1994. с.230-231. (A. I. アブラーモフ『「ロゴス」誌におけるカント主義と新カント主義について』『カントとロシアにおける哲学』、モスクワ、1994年、230-231ページ。)

上記の箇所であブラーモフはチェルパーノフについて、「カントの哲学説に大いに関心を持っていたものの、徹底したカント主義者であったことは一度もなかった」と評している。またアブラーモフは、この評言の少し前(229ページ)でも、チェルパーノフを含むロシアのいわゆる新カント主義者のほとんどすべてが一時期カント哲学を支持しただけで、一貫してカント派であったわけではないことを指摘している。

⁶ シュペートがヒューム流の懐疑論者であったことについて、ベールイは次のように証言している。「当時の“陳列館”において最左翼であると私に思われたのは、グスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペートであった。彼は我々のところにキエフから移って来たばかりで、女子学校(教育学校とグリエーの学校)の講義において絶大な成功を収めていた。彼は『ヒュームにおける因果性の問題』に関する自著を出版したばかりで、ヒューム流の懐疑主義に、それが安楽椅子でもあるかのように心地良さそうに座っていた。だが、それは当時支配的であった諸潮流に対する拒否の様式にすぎなかった」。

Бельи А. Между двух революций. М., 1990. с.273. (A. ベールイ『二つの革命の狭間で』、モスクワ、1990年、273ページ。)

すでに述べたように、シュペートが『ヒュームとカントにおける因果性の問題 —カントはヒュームの疑念に答えたのか』を出版し、またキエフからモスクワに移ったのは1907年である。ベールイの証言によれば、この頃すでにシュペートはヒューム主義者であったことになる。もし、ハールトの言うとおりに、シュペートがカント主義者であった時期があるとすれば、それは1907年以前、つまりキエフ大学の学生だった頃しか考えられないわけであるが、しかし仮にそのとおりだったとしても、哲学科で学んでいる最中のシュペートのカント主義がいかほどのものであったろうか。それは主義というよりは、熱心な研究とみなされるべきものだったのではないだろうか。いずれにせよ、この問題は最終的には最初期のシュペートの著作(『ヒュームとカントにおける因果性の問題』の他、書評類や1905年の論文「実験心理学における記憶」など)の詳しい検討によって解決されるべきである。